様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８３０１２４

研究課題名（和文）現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Succession and Creation of the Ryukyu Performing Arts in the Higher Education Institutions Contemporary Okinawa

研究代表者
呉屋　淳子（GOYA, Junko）

国立民族学博物館・文化資源研究センター・機関研究員

研究者番号：１０６３４１９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：近年では高等教育機関で伝統芸能を修練しながら、芸能活動を展開している様子がみられる。そのような彼らの実践には、伝統芸能に対する捉え方や価値観の変化がみられ、新しい伝統芸能を創出した。しかしながら、芸能を実践するにあたって「伝統」と「創作」のはざまで揺れ動いている様子も見られた。同時に、伝統文化の継承を担う彼ら自身は芸能の中で「沖縄らしさ（Okinawaness）」をいかに表現するかという問いに向き合っていた。

研究成果の概要（英文）：In recent years, students can be seen training in the traditional performing arts at higher education institutions while developing arts activities. Such practices have brought about both a change in how these arts are perceived and a set of values which have created new traditional arts. However, upon practicing these arts a fluctuating between tradition and creation has become evident. At the same time, those who shoulder the passing down of traditional culture have been facing the issue of how to express a certain sense of Okinawan-ness in these performing arts.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：伝統芸能　高等教育機関　文化的アイデンティティ　ライフストーリー　二重的な教授

１．研究開始当初の背景

高等教育機関で行われている伝統芸能教育を芸能の新たな継承過程と位置付け、学習者のライフストーリーに注目し、彼らの教授経験や芸能実践活動との関わりから新たな「琉球芸能」が創出されるメカニズムを明らかにする。

従来、沖縄には「家元制度」がなく、戦後に展開した師匠・弟子との連鎖によって構成された「舞踊・三線研究所」（以下、研究所とする）といった修練の場で「流派」を意識した芸の伝達が行われてきた[e.g.矢野輝雄 1988]。それは現在も同様であり、多くの若手芸能実演家たちが研究所において技を磨きつつ、指導者として後輩の指導にあたっており、先行世代から継承されてきたわざや継承形態が維持されている。ここでいう若手芸能実演家とは、沖縄における伝統芸能のひとつである琉球芸能の舞踊、歌、三線の演者であり、且つ沖縄県内において実施されているコンクールで新人賞以上の賞歴を有する 40 歳代以下の者を指している。彼らの実践活動の場は、主に県内外および海外の劇場の舞台であり、専門的な技能を保持する芸能家として活動している。

現在、沖縄県唯一の総合芸術大学である沖縄県立芸術大学(以下、沖芸)には、研究所に所属しながら芸を磨いている学習者が在籍しており、すでに一定人数の卒業生を輩出している。現在活躍している多くの若手芸能実演家は沖芸の琉球芸能専攻の卒業生であり、在学しながら舞台活動を行っている者も多い。そこで行われるカリキュラムに注目してみると、琉球芸能の様々な「流派」の型を学ぶだけでなく、日本音楽および芸能、そして東洋音楽といった履修科目があり、学習者たちも積極的に参加している。申請者のこれまでの調査によると、近年の若手芸能実演家たちの実践活動には、琉球芸能に対する捉え方や価値観の変化がみられる。特に、彼らの実践舞台である国立劇場おきなわやその他の舞台へ足を運ぶ現代の「観客」らの嗜好に答えるための創作芸能にも積極的に取り組んでいることが明らかになっている。

しかしながら、その一方で若手芸能実演家たちが「伝統」の維持も意識しているといった側面もみられ、「伝統」と「創作」のはざまで揺れ動いている様子も見られた。そこで、本研究では若手芸能実演家たちが芸能を実践し、かつ学習していく過程に注目し、彼らが芸能を実践していくにあたってどのような意識に基づいて「創造」と「伝統」を取捨選択していくのかという点を明らかにする。さらに、現代沖縄における伝統芸能の継承過程を沖縄の政治的・社会的・文化的コンテクストに位置づけて検討することを通して、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為についての再検討を迫る。

２．研究の目的

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。

そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される＜教授システム＞、行政文書の分析から①高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、②「伝統」と「創造」のはざまで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的関係を考察する。

これらを通して、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響を明らかにする。

３．研究の方法

琉球芸能を徒弟制のなかで芸を修練し、そして高等教育機関において琉球芸能を学問的研究の対象としながら学んだ経験のある若手芸能実演家らのライフストーリーを中心に、沖縄における伝統芸能の継承形態の今日的状況を描きだす。同時に、聞き取り調査に加え、沖芸の琉球芸能専攻の創設背景や現在の状況を把握する文書、カリキュラムに関する資料、さらに沖芸とリンクする関係資料を収集し、教授側と学習側の双方に焦点を当てて記述を行う。そのために、聞き取り調査と資料分析を遂行する上で次の三つの問いを軸にみていく。①琉球芸能が高等教育機関で教授される際、芸能はどのように変わっていくのか。②従来の教授基盤と新たな教授基盤を往復する形で、芸能を身につけた若手の担い手たちはどのように伝統芸能を捉えているのか。③沖縄の芸能の「伝統」が継承されるなかで、教授基盤の多様化はどう位置づけられるのか。

（調査対象）

(a)

沖縄県立芸術大学で学んだ若手芸能実演家らの芸歴には個人差があるものの、その殆どが幼少期において「研究所」に入門していることが明らかになっている。彼らは長期間にわたって「研究所」にて特定の師匠に師事し芸を磨いていくため、芸事から進路に至るまで師匠が若手芸能実演家たちに与える影響が大きいことも考えられる。そのため、彼らが所属する研究所における芸の習得状況や師匠との関係性についても明らかにする。

(b)

沖縄県立芸術大学は 1986 年に創設された

総合芸術大学であり、日本国内で唯一の琉球芸能の教授基盤をおく大学でもある。沖芸の創設に関わった教員を含む関係者への聞き取りや文献資料等をもとに琉球芸能専攻をめぐる状況について明らかにする。具体的には、沖芸の創設や琉球芸能専攻の設置に関する背景はもちろんのこと、琉球芸能専攻のカリキュラム、教育目標、教育内容についても大学側の資料をもとに明らかにする。特に、現行のカリキュラムを分析すると共に、琉球芸能の実践的教授と理論的教授に関わる講義の参与観察を行うことを予定しており、すでに関係教員から了承を得ている。

(c)
2004年に誕生した国立劇場おきなわは、専門的に沖縄の伝統芸能を鑑賞できる劇場であり、その他にも芸能の伝承育成事業や関連する調査研究、そして保存と振興を目的として設立された研究施設でもある。国立劇場おきなわで行われる公演の企画・運営には、沖縄県の文化振興課が一部係わっている。
このような文化事業は、県民や観光客にとっては伝統芸能の鑑賞機会であり、若手芸能実演家にとっては芸能を実践する場になっている。しかし、申請者の調査によると、琉球芸能をいかに保存し振興していくかということを巡って様々な議論があったことが明らかになっている。そこで、沖縄県の文化事業関連および国立劇場おきなわにおける伝統芸能継承事業に関する文書資料も合わせて収集し分析を行い、行政側が芸能の継承に対してどのような影響を与えているのかを捉えていく。

４．研究成果
（１）沖縄県立芸術大学（以下、沖芸）の琉球芸能専攻を在学または修了した若手芸能実演家のライフストーリーから現代沖縄の伝統芸能の継承に関する実態の分析を行った。その際、沖芸の琉球芸能専攻を修了した若手芸能実演家のライフストーリーから学習者が「継承の主体」となっていく様子に着目した。本研究のキーインフォーマントの協力を得て、「研究所」での活動、「研究所」の師匠を交えてのインタビューを行うことができ、彼らが歩んできた芸能人生においてどのように芸を学習し、そして継承者としての自覚を身に付けてきたかについて具体的な継承の実態を明らかにした。

（２）「研究所」と高等教育機関は、教育形態や継承内容が異なるものの、沖芸に在学または修了した若手芸能実演家らはこの双方の場において芸を磨いた経験を持っている。１）で明らかになったことを踏まえ、それぞれの場における教授の特徴を明らかにし、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響について検討した。その成果は、2013年度に行われた学会で発表した。

（３）「伝統」と「創造」のはざまで揺れ動く彼らの伝統芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的関係を考察した。その結果、彼らの「二重的な教授の経験」、つまり、従来の修練の場である「研究所」に加え、高等教育機関において芸能の修練は「沖縄らしさ（Okinawa-ness）」をいかに表現するかという問いに向き合うきっかけとなっていた。また、このような経験は、沖縄人としてのアイデンティティを再考する機会ともなっており、新たな芸能の「創造」にも繋がっていた。
（４）琉球芸能を学ぶことを目的に沖縄県立芸術大学に在籍する留学生（日系人）へのインタビューを通して、沖縄県内の三線・舞踊「研究所」と移民先の沖縄県人会を中心とする稽古場との関係性について明らかにした。母県の「研究所」と南米（ペルー）の稽古場は、教育形態や継承内容が異なっていることを明らかにした。また、移民先の稽古場では、母県の高等教育機関で唯一琉球芸能を専門的に学ぶことができる沖縄県立芸術大学で芸能を修練することが芸道を極める上で必要条件の一つであると認識されていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
呉屋淳子「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性―沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から―」韓国・中央大学日本研究所編『日本研究』第 36 輯、査読有、2014、pp.293-310

〔学会発表〕（計１件）
Junko GOYA,
Young Traditional Art Performers in Okinawa and Their Dual Educational Experiences, Biennial Meeting of the Society for Psychological Anthropology, San Diego, CA, USA, 5,April,2013

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
呉屋淳子（Junko GOYA）
国立民族学博物館・文化資源研究センター・
機関研究員
研究者番号：10634199